
小学校教育における異文化間
バーチャル・エクスチェンジ：
PADLETを活用した非同時性活動
の試み
(INTERCULTURAL VIRTUAL
EXCHANGE IN PRIMARY
EDUCATION: AN ATTEMPT
OF ASYNCHRONOUS
ACTIVITIES USING PADLET)

SHINJI OKUMURA (奥村 真司)
Bunkyo University

MASAE UEKUSA (植草 雅絵)
Tecoma Primary School

ABSTRACT

This paper reports on an attempt at virtual exchange between Japanese and Australian primary schools, particularly asynchronous exchange activities, using Padlet. Since this project was conducted while Australian primary schools were offering remote classes due to the COVID-19 pandemic, only cultural information was provided from the Japanese side, and comments from Australian students were limited. However, by providing cultural information from learners of the same age group, the Australian students perceived Japanese culture as more familiar than the ready-made information from the Internet or books. Positive attitudes and awareness toward Japanese students and Japanese culture contributed to cultivating motivation to learn Japanese. Intercultural Virtual Exchange (VE) across borders requires coordination of time differences and school schedules. Nonetheless, asynchronous exchanges using Padlet or other means, as in this project, can be easily implemented following the participating teachers' instructional plans. We hope that this case will be recognized as an example of asynchronous intercultural exchange activities and lead to the expansion of VE practices across borders.

[キーワード] 初等教育、言語 (languages) 教育¹、異文化間コミュニケーション、バーチャル・エクスチェンジ、Padlet

はじめに

近年、発展が著しい情報通信技術 (Information Communication Technology : ICT) は、子どもたちの日常生活だけでなく、学校教育においても多様性をもたらしている。Raja and Nagasubramani (2018) は、テレビ会議システムなどのICTツールによって、教室の壁や国境を越えてさまざまな場所にいる相手と、容易にコミュニケーションをとることができること、教育のグローバル化につながっていると主張している。このような遠隔コミュニケーションは、バーチャル・エクスチェンジ (Virtual exchange: VE) と呼ばれ、学習者グループが、教育者や専門家の指導のもと、他の文化的背景や地理的位置の異なる相手とオンライン上で異文化交流や協働的な学びを行うものである (O'Dowd, 2018)。

VEは、時空間的な視点において、同期型と非同期型に分類できる。同期型VEとは、ビデオ会議システムを使用したリアルタイムの活動である。非同期型VEには、ソーシャルメディアにおける写真や映像および文字媒体を組み合わせたマルチモダールなコミュニケーションがある。前者は、参加国や地域間の時差や学校のスケジュールの違いによって、実施スケジュール調整の必要性があるが、後者は実施上の時差の影響を受けることはなく、学校間スケジュール調整も比較的容易にできる (Okumura, 2022)。

本論で扱う小学校教育段階における非同時性のVEの研究として、Jauregi and Melchor-Couto (2018) が行ったオランダの中学校生徒とスペインの児童の英語とスペイン語学習のバイリンガルプロジェクトがある。このプロジェクトでは、オランダの中学校とスペインの小学校の学習者が、非同期で4つのタスクログの作成) を実施し、グループ毎に設定されたPadletウォールに、自分のグループのVlog を共有した。この研究の結果として、オランダ人生徒よりもスペイン人児童のほうが、オンラインでの交流活動に意義を感じていることを見出した。また、教師が学習者の自主性を尊重しながら積極的に指導に携わることが、児童にとって、海外の学習者とのコミュニケーションがより価値あるものになりうることを示唆した。

我々の先行研究では、教育用ソーシャルネットワークサイトEdmodo²を利用した日本とオーストラリアの児童による異文化間VE交流について報告した (奥村・植草, 2018) 。このプロジェクトでは、英語を学習する日本の児童と、日本語を学習するオーストラリアの児童が、教育用ソーシャルメディアであるEdmodoの掲示板機能を使用しそれぞれの目標言語でお互いの国の文化を紹介する活動を行った。このプロジェクトの成果として、双方の児童が自分達の投稿に対して相手からの反応を即座に受け取ることができたことで活動への達成感を得ることができた。また、双方の児童の多くが、目標言語でのコミュニケーションの楽しさを感じることができたこと、更には、本プロジェクトが言語 (languages) 学習と異文化理解において、児童の主体的な学びを促す効果があったことが認められた。

1 本稿では、ビクトリア州の言語教育政策に鑑み、第2言語、第3言語、外国語を含む付加言語を言語 (languages) と表記する。

2 Edmodoは、2022年9月にサービスを終了した。

これらの先行研究に鑑みても、非同時性の異文化間VE 活動は、児童の言語 (languages) 学習と異文化理解にとって有意義な活動になると言えよう。

そこで、筆者1は、筆者2であるオーストラリアの小学校の日本語教師、日本の小学校の英語専科教師とともに、小学校教育段階の言語 (languages) 教育における異文化間VEプロジェクトを2021年4月に計画し、掲示板アプリケーション Padletを活用した非同時性交流を5月から10月に実施した。

背景

オーストラリア、ビクトリア州の学校教育カリキュラムは、Victorian Curriculum and Assessment Authorityによって統括されている。VCAA (n.d.) は、Victorian Curriculumにおいて、ICTの使用を推奨しており、言語 (languages) 学習者は、ICTの使用によって、その言語を話す様々な人々とつながり、コミュニケーションをとることができる³と述べている。一方、オーストラリア国内の日本語教育においては、日本語使用者³と交流する機会が少なく、学習者が日本とのかかわりを意識することが難しい。そのため、ICTを活用し、日本在住の、とりわけ同世代の日本語使用者と交流することは、VCAAが期待する言語 (languages) 教育における学習者の意欲と異文化理解向上につながると言える (奥村・植草、2018)。

日本においても、小・中学校の外国語 (英語) 教育において、学習者が目標言語である英語を実践的に使用したり、異文化理解を促進したりするために、ICTを活用した地域社会または国際社会を巻き込んだオンライン交流を推奨している (文部科学省、2016)。しかし、日本の英語教育においても、英語使用者⁴とのつながり、とりわけ、同年代の英語使用者との交流は、極めて稀である。Toscu (2021) が、VEプロジェクトを実施するにあたっては、社会的・文化的な視点を共有しやすい同年代との交流が理想的であると指摘しているように、VEによるオーストラリアと日本の児童が国境を越えてオンライン上で交流することは、双方の児童の言語 (languages) 学習や異文化理解において貴重な経験となると考える。

また、本プロジェクト実施期間に関わるもう一つ重要な背景として、新型コロナウイルス感染症 (以下、COVID-19) パンデミックがある。2020年初頭から世界中に広がったCOVID-19は、社会構造を大きく変化させるとともに、世界中の国や地域の学校教育にも多大な影響を及ぼした。ビクトリア州と日本においても、2021年には、一定期間の学校閉鎖が行われたり、遠隔授業が行われたりした。

プロジェクトの概要

目的

異文化間VEを成功させるためには、明確で現実的な目標を設定することが非常に重要である (Chun,2015)。そこで、本プロジェクトにおけるオーストラリア側の目標として、以下を設定した。

- 1) 児童の日本文化理解を促進すること
- 2) 学校、保護者、地域社会への日本語教育の啓発
- 3) 日本旅行への関心を高めること

参加校と参加者

小学校教育におけるVEプロジェクトを研究対象としている筆者1は、プロジェクトリーダーとして (以下、PL)、2021年4月に小学校言語 (languages) 教育のためのVEプロジェクトを構想した。PLは、英語教育および国際理解教育に理解のある、東京都町田市立小山ヶ丘小学校の当時の学校長に打診し、VEプロジェクトを実施する許諾を得た。小山ヶ丘小学校からの参加者は、英語専科教員1名 (以下、JT) およびJTが授業を担当する日本語使用者かつ英語初級者の6年生138名である (以下、JS)。

3 本稿では、母語使用者、非母語使用者の用語は使用せず、日本語を日常および学校で使用している者を日本語使用者と表記する。
4 日本語使用者同様、英語を日常または学校で使用している者を英語使用者と表記する。

本プロジェクトの相手校を探す段階においては、日本語教育が盛んなオーストラリアに着目した。この理由として、言語 (languages) 学習者は、その言語の使用者に関わりたい、理解したいという真摯な気持ちや敬意を持つことが、言語 (languages) 学習への意欲向上につながること (Gardner, 2001)、また、学習言語の使用者のコミュニティへの肯定的な感情、学習言語への実用的な価値、学習言語を使用している自分のイメージの融合が、言語 (languages) 学習の意欲を最大化すること (Czser & Dörnyei, 2005) がある。

オーストラリアの学校を探すため、PLは、当初、オーストラリアの公的な言語教育団体へのアプローチを模索したが、プロジェクトに参加してくれる相手校を確実に見つける保証がなかったため、個人的なネットワークを活用することとした。その結果、PLのモナシュ大学の元同僚であり、メルボルン郊外にあるテコマ小学校で日本語教育に携わる日本人教師 (以下 AT) が、プロジェクトの趣旨を理解し、参加に同意した。ATは、当時の所属学校長の許可を得て、正式に参加することとなった。所属校長が、日本語教育に大変理解があることが、許可を得ることができた大きな要因であった。この学校の参加者は、ATとATのクラスで学ぶ英語使用者かつ日本語初級者の5年生62名、6年生60名である (以下、AS)。

2021プロジェクト

1. 使用アプリケーション

今回のプロジェクトでは、掲示板アプリケーションPadletを活用した。Padletは、パワーポイントで作成した資料や撮影した動画などを、他の人と共有することができる掲示板アプリケーションである。英語や日本語を含む40言語に対応しており、一定のサービスを無料で使うことができる。また、設定したページのURLを共有することで、相手を限定して交流することができる。Padletには、いくつかのレイアウトがあり (写真1)、どのレイアウトでもアップロードされた資料や動画を一目で見ることができる。そして、その資料や動画に登録された人がコメントすることができる。Waltemeyer, Hembree, and Hammond (2021) は、教育ツールとしてのPadletの使用は、生徒の創造性と共同学習を促進する貴重な学習リソースとなると主張している。Lyn (2022) は、COVID-19の大流行時にPadletの利用者が増加し、Padletの利用に関する研究が行われたと述べている。

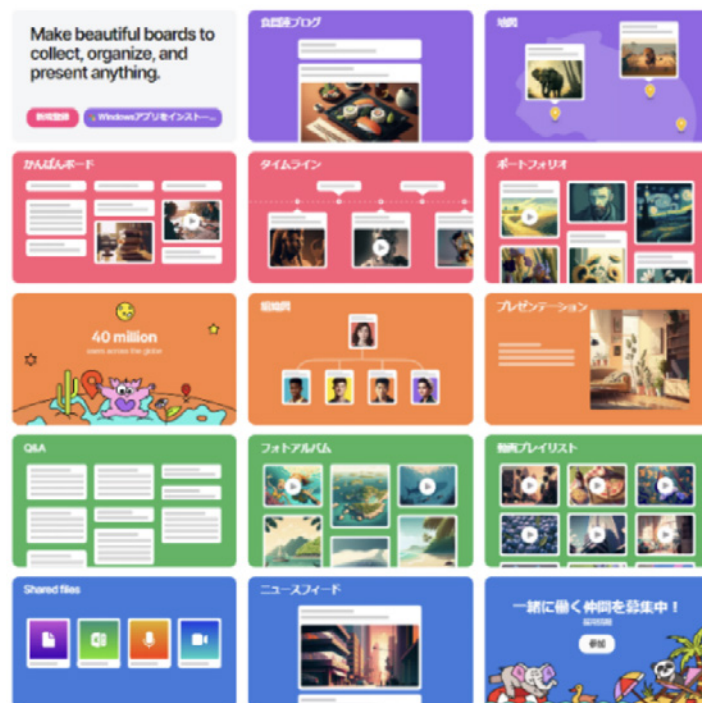


写真1 Padlet のレイアウト (出典: <https://ja.padlet.com/>)

2. 計画と内容

プロジェクトは、日本の小学校外国語 (英語) 教育の内容に基づいて計画することとした。その理由としては、日本の小学校外国語 (英語) 教育では、学習指導要領に基づいた体系的な指導内容が確立されており、その内容が文部科学省検定教科書として具現化されているからである。したがって、参加する双方の教師にとって、VE交流のトピックを決めやすいという利点がある。

本プロジェクトの活動内容は、外国語科（英語）の年間カリキュラムと使用教科書の授業単元に基づいて検討された。5月の授業で、社会的行事、文化、学校の紹介が扱われていたことから、PLとJTは、この内容をVEプロジェクトに取り入れることとした。その計画内容をATに伝え、テコマ小学校の日本語教育の状況を考慮しながら、内容に修正を加え、最終的な合意を得た。また、PL、JT、ATが、各活動の前後にE-mail やコミュニケーションアプリケーションLINEを使用したオンラインミーティングを行い、活動内容の確認や活動における指導上の配慮事項等を話し合う機会を設けた。

表1 Padletを活用した活動のスケジュール

活動時期	活動内容
2021年 5月中旬	JSによる準備活動1 紹介したい学校行事や年間行事の決定と調査 発表するテーマごとにグループ分け 発表内容についての話し合い
5月下旬	JSによる準備活動2 発表用原稿作成 発表用写真・スライドの準備 発表台本の作成 発表動画の作成
8月	JTによるATへの動画提供 ATによるPadlet へのアップロード
8月-9月	ASによる動画視聴とコメント活動
10月	JSによるコメントの閲覧

教室での活動内容は、JTが主として考え、JSをグループ分けし、グループ内での話し合いをもとにビデオ撮影する内容を決めることとした。学校紹介に関する内容としては、遠足や学芸会などが選ばれ、文化に関する内容としては、国民の祝日、お花見、夏祭り、正月、日本食などが選ばれた。

JSは、5月中に日本の学校や日本文化についての発表の準備を開始した。準備の具体的内容は表1に示した通りである。作成した発表動画は、JTがYouTubeにアップロードした後、ATがPadletに掲載した。写真2は、本プロジェクトのPadletの一部である。また、写真3は、JSが、子どもの日（Children's Day）を紹介した内容の一部である。



写真2 本プロジェクトのPadletの一部

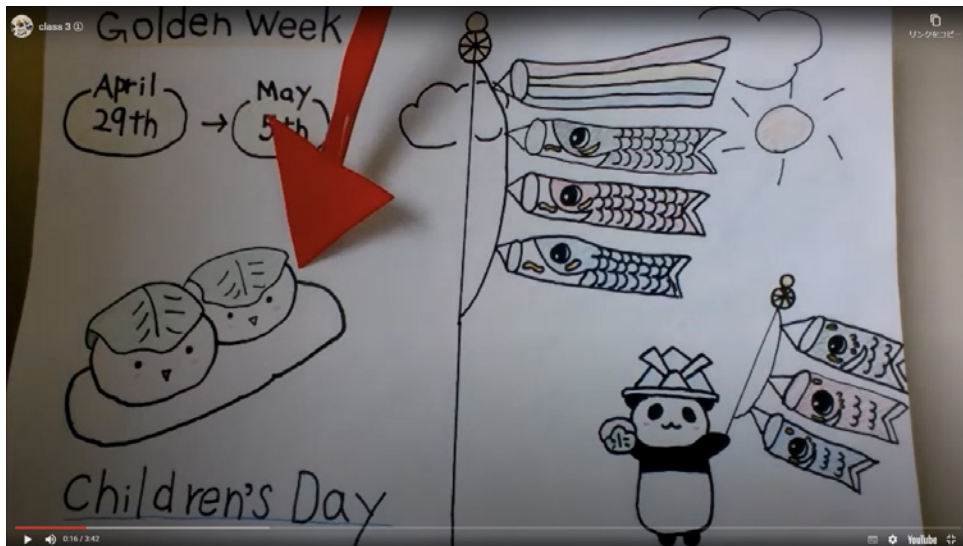


写真3 子どもの日 (Children's Day) を紹介した内容の一部

本プロジェクトのPadletは、テコマ小学校の学校スケジュールに合わせて、8月にASに共有された。本来は、ASは通常の日本語授業内で、Padlet上の日本文化情報を閲覧し、コメント活動を行う予定であったが、COVID-19パンデミックによる学校閉鎖および遠隔授業への移行により、Padletの閲覧とコメント活動は自宅での自主学習の一つとなった。

実践の成果

ASの日本文化理解

ASが、JSの各文化紹介ビデオに対して投稿したコメントには、日本語で「すごいね」、「ありがとう」、「ta me shi te mi ta i na (ためしてみたいな)」などや、英語で“Cool”、“Good job”、“I want to try that”や“Very cool drawing”. など動画に対して共感するようなものが多く見受けられた。これは、日本人と日本文化への肯定的な態度の現れであると捉えることができる。

また、テコマ小学校が12月に対面での日本語授業を再開した後は、AS が、JSおよび日本文化に対して好意的な意識や態度を持っていることを、ASの発言から知ることができた。ATは、教師からの一方的な日本文化紹介のインプットよりも、実際に存在する日本人児童の顔を見て、生の日本語を聞き、日本文化の情報に触れることが、ASの日本語学習、文化理解に対する肯定的な意識の構築につながったと認識した。更に、日本語学習者がどのようなことをしたいのか、また、どのようなことに疑問を持ったり、不思議に思ったりするののかを認識することができた。他には、距離的に離れた日本を近くに感じ、日本語学習を現実の世界のものとして捉えることができたことを認識した。

この結果は、Gardner (2001) の、言語 (languages) 学習者は、その言語の使用者に関わりたい、理解したいという真摯な気持ちや敬意を持つことが、言語 (languages) 学習への意欲向上につながるという主張に一致するものであり、JSや日本文化に対するASの肯定的な態度や意識は、日本語学習への意欲向上につながると言える。

学校、保護者、地域社会への日本語教育の啓発

プロジェクト終了後、ATはテコマ小学校のニュースレターに活動の記事を執筆し掲載した。他の教員やサポートスタッフは、このプロジェクトを肯定的に捉えていた。また、日本の小学校との交流は、参加したAS にとって特別な経験であるという認識を持っていた。教員やサポートスタッフに対する日本語教育への啓発において一定の効果があったと考える。

このプロジェクトに対する保護者および地域社会の感想については、COVID-19パンデミック中であったことから、残念ながら聞くことができなかったが、ニュースレターの記事を読んだ保護者や地域の人々に対しても、最近の日本語教育実践を知らせることができたと考える。

日本旅行への関心

このような日本との交流プロジェクトを継続的に実施することは、上述の通り、テコマ小学校全体の日本や日本文化への関心を高めた。そして、テコマ小学校の児童が、もっと日本を知りたい、そして日本へ行ってみたいという意欲を持ち、それぞれの私的な日本旅行への動機を掻き立てるきっかけとなったとも考えられる。これは、COVID-19 パンデミック後に、多くの児童が日本へ旅行するようになったことから明らかである。

異文化間VEにおけるPadletの有効性

計画当初、ATは通常授業で指導しながら、本プロジェクトに取り組む予定であったが、前述の通り、COVID-19対策のロックダウンにより、遠隔授業となってしまった。ロックダウンが延長されるたびにこのプロジェクトをどうにか続けられるタスクを設定するようにした。

ASが自宅待機の状況においても、Padletを活用した非同期型の活動によって、自宅でJSの文化紹介を閲覧し、コメントをすることができた。遠隔授業中だったため、コメント回答率は高くなかったが、日本語のタイピングのためにウェブサイトを利用し、使いたい表現を模倣するなどし、JSの投稿に対して日本語を使ってコメントしようとする意欲と努力が認められた。

このように、Padletのような非同期性の掲示板アプリケーションの活用は、COVID-19パンデミックによる遠隔授業中という困難な状況にあっても、スケジュールや活動内容の変更に柔軟に対応できる点において、言語 (language) 教育において有効であると言える。これは、本プロジェクトの大きな収穫となった。

課題

本プロジェクトは、COVID-19パンデミックによる遠隔授業中という困難な状況の中でも、上述のような成果を見出した一方、Padletの使用に関しては、課題もあった。

第一に、1つのインターフェイスに、日本のすべての文化情報が提示されたため、日本語初級学習者であるASが、英語初級学習者であるJSの英語を理解するという複雑な自主学習タスクとなったことが挙げられる。遠隔授業中であったため、ATにメール等で質問が来ても、言葉で説明するしかサポートができなかった。その結果、ASが細かい日本文化の情報を十分に理解することが難しくなってしまった。

第二に、JSの作成した一部のビデオの内容が、英語を使って説明されているものの、発話が理解しにくく、十分な視覚情報が準備されなかったことも、ASが十分に投稿の内容を理解できない要因となった。初級言語 (languages) 学習者が文化情報を提供する場合には、絵などの視覚情報は必須であろう。

以上のように、VEの活動を充実させるためには、十分な事前準備と活動中の適切な支援が必要となることから、Jauregi and Melchor-Couto (2018) が指摘している、教師が積極的に指導に携わることの重要性が示された。

おわりに

本プロジェクトは、COVID-19パンデミックによる遠隔授業中での実施となったため、テコマ小学校側の活動が限定的で、小山ヶ丘小学校からだけの文化情報提供になってしまったが、この点を肯定的に捉えるならば、オーストラリアの日本語教育への文化的リソース提供の一端を担うことができたと言える。同じ年齢の学習者が、同じ社会的、文化的経験を持っているかどうかは今後検討の余地があるが、少なくとも、インターネットや書籍などの既製の情報よりも、日本文化を身近なものにとらえることができたと言える。

また、今回のプロジェクトはPadletを活用した非同時性活動の初めての取り組みであったことから、2021年の5月から10月までの1回のみの実施となったが、それでも双方の児童にとって、普段の教室内の授業では経験することができな

い異文化理解の貴重な機会になったと考える。将来的には、日本とオーストラリアの小学校の年間スケジュール内で調整することにより、複数回の交流も可能となるであろう。

国境を越えた異文化間VEは、時差や学校スケジュールの調整が必要となるが、本プロジェクトのような掲示板アプリケーションを使用した非同期性の交流であれば、参加する教師の指導計画に沿った形で実践がしやすく、小学校での言語 (languages) 教育における異文化理解活動に一定の成果を見出すことが可能となる。

本事例が、非同期性異文化間交流活動の一例として認知され、日本、オーストラリアのみならず、世界中の言語 (languages) の教師が興味を持ち、国境を越えたVE実践の広がりにつながっていくことを期待する。

参考文献

和文文献

奥村真司・植草雅絵 (2018) 「オーストラリアと日本の子どもたちをつなぐテレコラボレーションプロジェクト」 <<https://nsjle.org.au/proceedings/#2018-proceedings>>2023年11月2日参照
文部科学省 (2016) 「外国語教育におけるICTの活用について (たたき台) (現状と今後の方向性)」 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/25/1371098_5.pdf> 2023年12月7日参照

英文文献

Chun, D. M. 2015. Language and culture learning in higher education via telecollaboration. *Pedagogies: An International Journal*, 10(1):5-21.

Cszér, K. and Dörnyei, Z. 2005. "Language Learners' Motivational Profiles and Their Motivated Learning Behaviour." *Language Learning*, 55 (4):613-659.

Gardner, R. C. 2001. "Integrative motivation and second language acquisition". In *Motivation and second language acquisition*, edited by Z. Dörnyei and R. Schmidt, 1-19. Honolulu: National Foreign Language Resource Centre.

Jauregi, K., and Melchor-Couto, S. 2018. "Successful Telecollaboration Exchanges in Primary and Secondary Education: What Are the Challenges?" Research-publishing.net, Paper presented at the EUROCALL 2018 Conference (26th, Jyväskylä, Finland, 2018).

Lyn, J.C.I. 2022. "Using Padlet as a learning space for simulating real-life business communication." *TESL-EJ*, 26 (3): 1-12.

O'Dowd, R. 2018. From telecollaboration to virtual exchange: State-of-the-art and the role of UNICollaboration in moving forward. *Journal of Virtual Exchange*, 1-23. <https://journal.unicollaboration.org/article/view/35567>

Okumura, S. 2022. "Toward successful telecollaboration using SNSs in EFL instruction: What elements should be incorporated and considered?" *Information and Communication Studies*, 65:1-10.

Raja, R., and Nagasubramani, P. 2018. "Impact of Modern Technology in Education", *Journal of Applied and Advanced Research*, 3, S33-S35.

Ramírez-Lizcano, N., & Cabrera-Tovar, M. A. 2020. "EFL Learners' Perceptions About Language Learning and Culture When Using Telecollaboration". *Profile: Issues in Teachers' Professional Development*, 22(2): 95-113.

Toscu, S. 2021. "Dos and don'ts of an effective telecollaboration project". *Kuramsal Egitimbilim Dergisi [Journal of Theoretical Educational Science]*, 14(2): 202-222.

Victorian Curriculum and Assessment Authority (VCAA) n.d. *Victorian Curriculum. Information and Communication Technologies and Languages*. <https://victoriancurriculum.vcaa.vic.edu.au/static/docs/Languages%20ICT%20v2.pdf>

Waltemeyer, S., J. H., and Helen, H. 2021. Padlet: the multipurpose web 2.0 tool. *Journal of Instructional Research*, 10: 93-99.